

續猿蓑集卷之上

芭蕉

いれりかてる梅の枝る

まのうしに富あらあう

おのころ馬もこの死羽織

心をささつて晩の梅もひ

まのふしゆあまら月の色

物脊うれて肌をさうたら



沾圃

馬寛

里圃

祐

蕉

波柿もも〜を風に吹れり
孫、跡とら 祖父(一)借涉
服指に替てあけら 孫 刀
煉ふ志あしをく物 孫の足
羽柴の小きく一さげ賣にま
十里をうさひ余所へあし
箱のまぶに小海埋てあし
向い海ししはあし(一)の書り新

蕉 佐 里 寛 浜 蕉 寛 里

前々う極丸海流やま 柳橋を
あつや、すあひ、まふのなつれ
あつやあつや〜花の〜あひて
ん〜た〜る〜ふ 物のをく口
まふ〜あ〜あ〜あ〜れ、作をま
伊勢の下向に海つ〜あ〜あ
あ 孫のあ 孫に伸らそ〜あ
く〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

蕉 浜 里 寛 浜 蕉 寛 里

禪寺に一月あそぶ砂の上
柳のう角りもてぬき丸
後わいの半に傳をいふや
ちねぬ娘みきう守内禮
月待よ傳おまのうらそらひ
離のう菊にぬきふさほし
中ねて身てぬおも極もあぐ
付傳もーちかきりりわん

蕉 沓 里 覓 沓 蕉 覓 里

削やにちり坂のあまの風
おぬいに望のさちねうら
う立て中らに舞はらあま
そ川と火入よおとら 蕉
花をさや跡もぬきあのうら
激かーらのちちかきふあ

里 覓 沓 蕉 覓 里

馬菟

雀カウの字や拵めてほろろのあま
 てりまぶの岸のおもしうま月
 高やぬを四つてまふれを秋まて
 物川ししかるまのそく月酒
 おねまふらまゆかみもあふく
 是まふらてふの洗足

沓圃
 里圃
 見
 沓
 里

悔さきつらふの「歩のこころ」
 懐懐とんてまらふありさう
 あやまらばあまのこころ氣さう
 ありあつらう国方り客
 何まもなくてあつらひつ
 風よふあつらふお輪の輪の月
 春新し秋のほろあつらへて
 一病のさうとあつらひ

里 葛 沼 葛 里 沼 葛 里 沼 葛

明らつら伊勢の幸洲のあつらひ
 世寒をさうとあつらひ
 借来もしさうとあつらひ
 まる静なりさうとあつらひ
 雪のあつらひ雪は掃かす
 まるぬ合点てあつらひ
 手こしたるさうとあつらひ
 と静寂あつらひのさうとあつらひ

里 葛 沼 葛 里 沼 葛 里 沼 葛

汁のきつよふらうすかよのち盡て
あゝあまをさす川刈てと皮
にじりきすの栲圖をちあし
厚のおさくおとを淋し
強うりてあしあつぬ小高
早下してなよよの粉肥
肌入て秋にちりりあつる月
影よとちあつるあつるの月

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

けし盛を寶の母にあとお向て
あつてけしあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月
あつてあつるあつるの月

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

とてききし海よりし海らみんる

里圃

多くのあさねのあぢぢぢぢぢぢ

佐圃

大根のそととね土よぬくれて

芭蕉

上下やよものねねあのおあ

馬寛

所切よ月足の所の信宗あ深

流

あらししとらあぢぢぢ

里

知恩彼の響り能鳴極りて
 けくし能鳴を楓わゆる
 想の響よあまうけなる
 月割てはぬをよんる
 状おを駿河の能御禮なり
 ありてはぬをよんる
 響の響よあまうけなる
 伊弉、毎つゝの綿とりのを
 流 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

うき猿を鶯とつれ立流りる
 き鳴るる鳴るる鳴るる
 舟舟の流の中より流るる
 柳の傍へ行むるる鳴るる
 而娘よあまうけなる
 こゝろをよんるる鳴るる
 素おの流流はるる鳴るる
 りかのおあつるる鳴るる
 流 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

後巻上

砂まじりの藤の申の絡線キスの
ふさく人々ひちちを 泣
火燧の火いけて持て出た川
一ふぬ〜 唯り来
折しを空月の起るまに
御に加減りちるおを
月影みこも〜とびあて
おもひのまゝにふるては

里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

手拂子娘をやめて娘のまこと
まふまのうらをむらてはま
たのおと躑躅のうらねと
寺のひけら山陰のま
冬より光止〜とら地の
一ふ降てあ〜るあ凡

里 佐 寛 里 佐 寛

後依上

九

沓圃

| | |
|--------------|----|
| 猿蓑にもれさらおの松もみ | 芭蕉 |
| はをさるるれと静やう | 芭蕉 |
| 水かき池のゆらりるありて | 支考 |
| い藤竹まははまをい | 惟然 |
| 鶏々あうらやうてさの月 | 蕉 |
| つるりと孔やいんをう | 考 |

女表上

十

血志まじし一荷てまじらる筋の魚
 空を採の癖をひきまじり
 舞うまてゆいともせじみ物
 中国ありの杖のまじり
 朔日の月をまじりやう振舞
 一まじりお織り失てまじりぬら
 きまじりなまじりまじりの比の根根
 らに門あらまじりぬの月
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

社あり一畑の人のうけおる
 ぬる像まじり^中淡りわ 爾
 んでまじりぬと井まじり花の笑のま
 層まじりまじりまじりまじり
 くら風の又まじりぬ北にまじり
 わらまじりに脈まじりまじり
 板の四保まじりまじり
 喧嘩まじりまじりまじり
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

夏巻上

大世川なほく二りある考の徳
 雲くさふ——申のさる考
 亦ら箱の架掛を答ぬ家立
 圃の世を重をさる考の徳
 酒ありとも有のやらふ月にて
 赤鶏頭をさる考 西蜀
 さるくね娘のさる考を
 藤汗のさる考を

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

もり花をさる考を
 大つうひの圃をさる考
 束搦もさる考を
 う——めて糸の平を押おふ
 けおさる油をさる考のけも
 鴨の油のさる考を

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

後巻上

今宵賦

野盤子

支考

今宵は六月十六日の夕々々あふあふい月
 東方の紅山よわけて衣裳の湖あのか
 きぬくふとれを今宵の何ぞいそし先
 尊卑の席をささげてささげし敵て
 〜〜〜快くささしよ湯をわけて野盤子
 ひらぬおのきぬしわかちをばくさく
 〜〜〜人さ真つと一先むとんあ〜福をば

ろろろろ色人の疑よろうひておちへ次窮
 争て月のかゝめよらなやすして憂々
 比を阿婆もたまたまのさかこらこら
 されし一を支考を以場のさ方よ何し
 おて時ふの比をあら久かたももおめなり
 着くは湖ニホのあちのやうてま〜
 わくれてい川うげ阿そいよおる〜
 のと青を夏の〜く照年いいた〜
 ら戻る芳の奥の宴何そ阿〜
 編ん

ろろろよ解て解めらものあ〜を罰迄の程
 よめまのま〜とた〜めれあひぬ

芭蕉

一あのおち解て照〜
 露を〜
 雪の〜
 ちさ華露よ又故お〜
 月影のちもちうらゐの色
 志しめて清きもろ加馬かよ
 芭蕉

猪子猪場の卯へ追みぬ
 山くくふに名をさしてあはれ
 取捨ちう面桶もそとふ火打鎌
 驚てユ又をさくうろ 照障
 おれう夏舟も流るく猪の車
 持御のうちよ夕日さく
 平畦よ菓を厨さく ねと疎
 秋風くくう戸の左風品
 然 考 考 考 然

馬りて旅ひぬる月の影
 危死てつきしもの名をさる
 餅好のこころに花をあはれて
 西月よのく 襟もよこさく
 暮風よ善徳のほもさく 然
 寂く 村へおけらく 考
 喰ふ子ぬ聲も響も口まいて 蕉
 何その町をら休よぢり 然

花はさきを様よ付とらそとて
 廣こいつらと種月照く末
 おおきく跡先よと川夫木の町
 際の日およ雪り氣ま
 天とらと手跡とぬ酒のりはな
 忌かえのふまに舟あつら
 封付—又菊まら月のみ
 そろしありとて盆の上揺れ

蕉
 蕉
 蕉
 蕉
 蕉
 蕉
 蕉
 蕉

花はさき

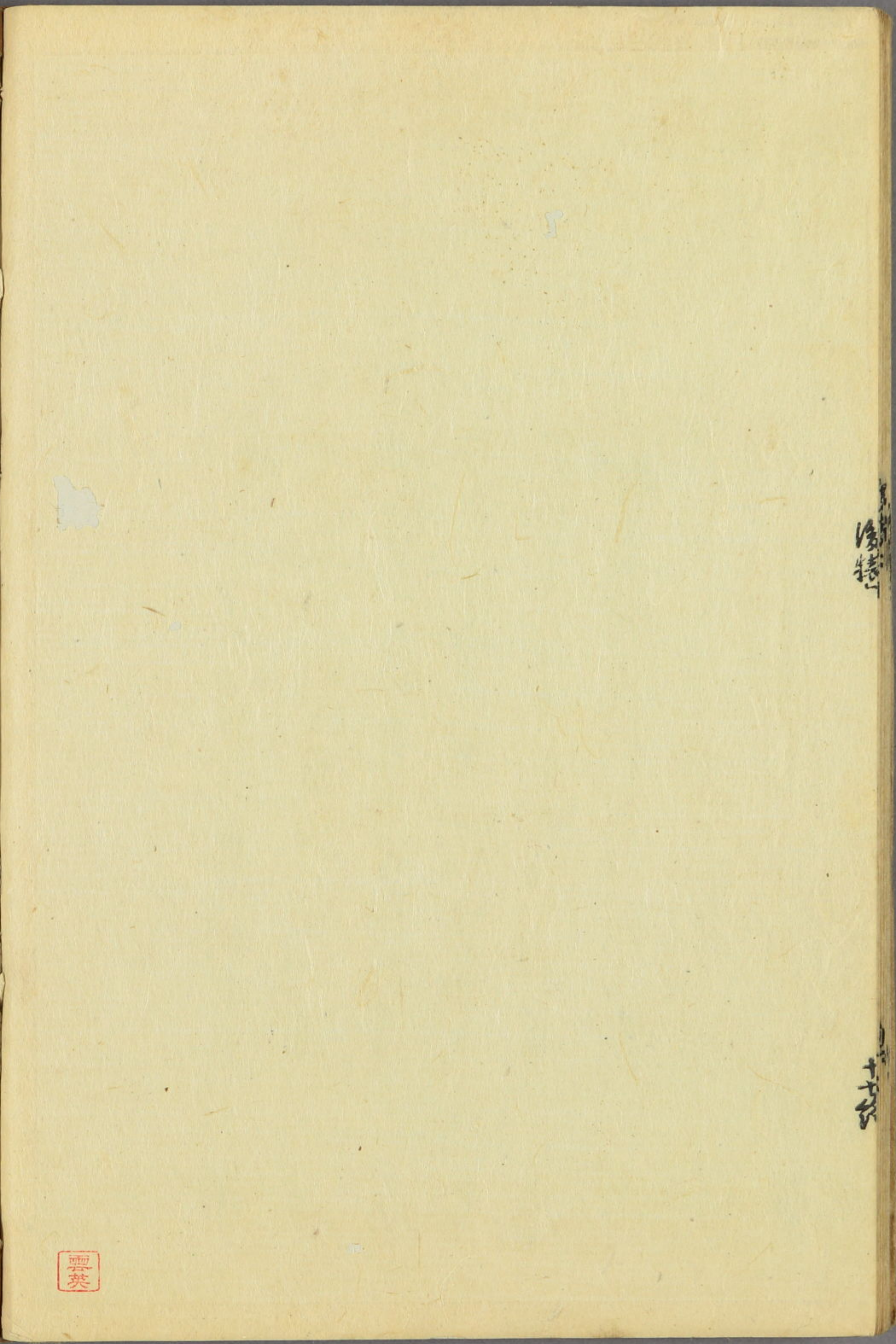
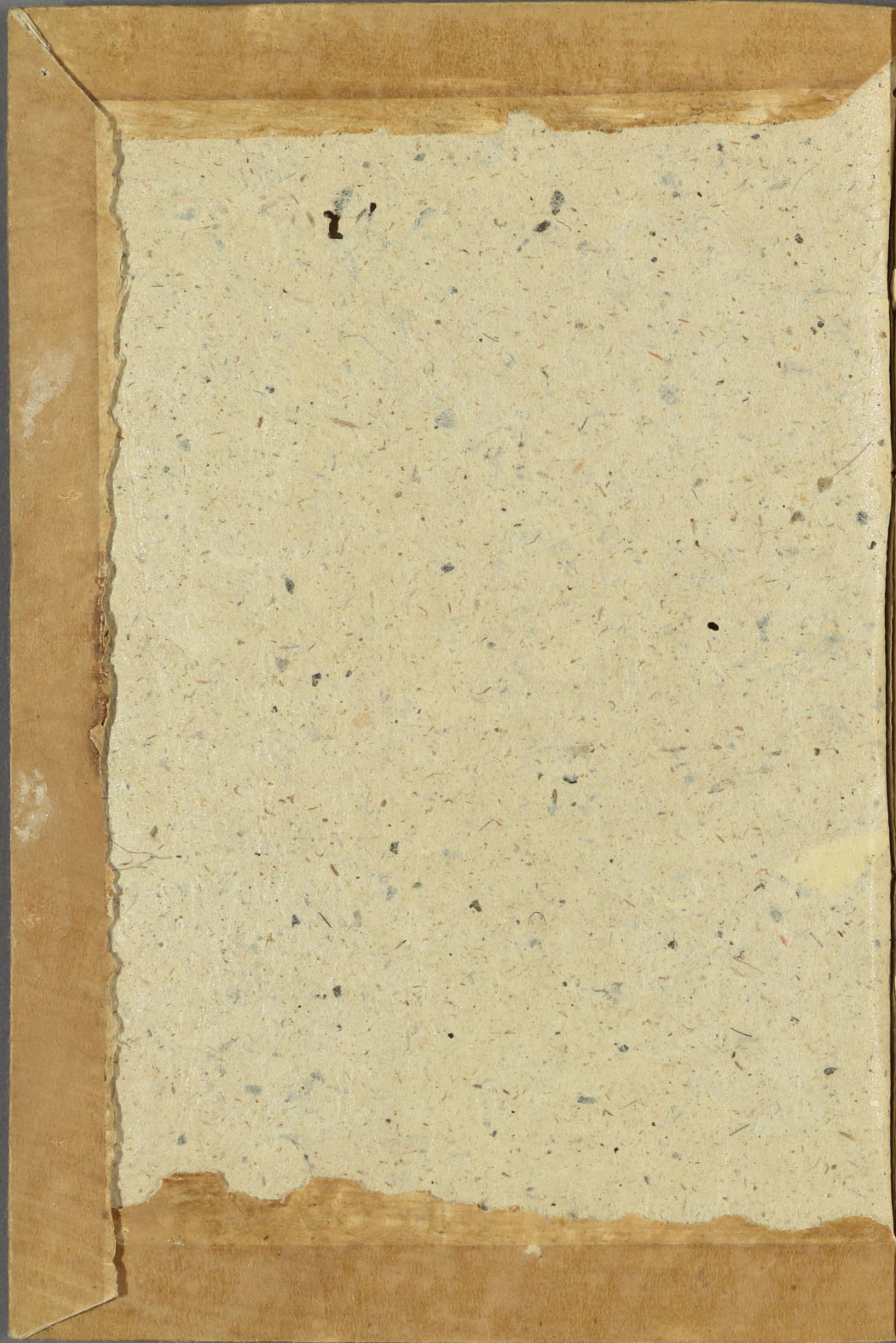
十六

虫籠つら四糸の角の何ふ所
 ちんねまあつら表 一固
 尺のりよ縫をえつら後袴の上
 ちやな袴のそんよすゆら
 蓋ちちる花もの之能おしをて
 腰うけつら—と後襟の下

然
 一
 一
 然
 考
 高

花はさき

十六



後
卷

十
五

雲
英

